

〈特別寄稿〉

等々力古墳（御嶽山古墳）発掘調査報告

徳川義宣

一 所在地の表示と関連遺跡

筆者が多摩川流域を調査してゐた時期は昭和二十年代から三十年までであつて地番・住居表示は改訂前であり、当時遺跡位置を記入してゐた地図も、当然当時の町名・番地で表示されてゐるので、本報告書に於いてはその地図「世田ヶ谷区」「大田区」「東京都区分詳細図」一五、〇〇〇分の一 日本地図株式会社 昭和二十四年六月十五日・同年七月五日各発行）の町名・番地を用ゐる。

本古墳は多摩川流域に点在する古墳群のひとつで、筆者が昭和二十四～二十六年頃踏査し地図に記入した古墳（推定を含む）は以下の通りである。

- 一 大田区田園調布二丁目三三九番地 亀甲山古墳
前方後円墳で二乃至三基の陪塚あり
- 二 大田区調布大塚町六三九番地 大塚古墳
亀甲山古墳より東北へ約九〇〇メートル離れ、多摩川縁より内陸に入る。円墳
- 三 世田ヶ谷区玉川尾山町一二七番地
円墳
- 四 世田ヶ谷区玉川尾山町八幡社内
円墳
- 五 世田ヶ谷区玉川尾山町五九番地 狐塚
円墳
- 六 世田ヶ谷区玉川等々力一丁目二一八三番地 等々力古墳（御嶽山古墳）
円墳
- 七 世田ヶ谷区玉川野毛町一〇六番地 大塚山古墳
円墳（のちに帆立貝型との説あり）
- 八 世田ヶ谷区上野毛町一一〇番地
小円墳

喜多見古墳も跡査した記憶があるが、地図には記入してない。

尚、同じ頃品川区内の古墳を数基踏査し一基を発掘してゐるが、『品川歴史館紀要』第十一号（平成八年三月三十一日発行）に報告が掲載されてゐるので本報告では触れない。

二 遺跡の位置と当時の状態

等々力古墳は右記のうちの六で、地番・住居表示改訂後は世田谷区等々力カー一八となった模様である。五の狐塚古墳は東南東約三八〇メートルに位置し、七の大塚山古墳は西北西約四三〇メートルに位置してゐる。台地上から多摩川へ向かって緩やかに傾斜し始めた地点に位置し、南約五〇〇メートルに多摩川を望み、西側は等々力溪谷を挟んで玉川野毛町の、縄文早期から後期に及ぶ大遺跡包含地（旧ゴルフ場跡）に続き大塚山古墳もこの包含地の中に在る。本古墳の西側裾には巡査派出所とその住宅が在り、等々力駅方面から多摩川堤に向かふ緩い坂路を横切った西側には不動堂と等々力不動の滝がある。南側および東側は民地に隣接して墳丘の周縁は既に削られたと見られた。北側には幅員三メートルほどの道路があり、その道路によって墳丘の裾は二メートル以上削り取られてゐると見られた。削り取られた面は土止めがなく崩落を続けてゐて積層の観察を可能にしてをり、埴輪片と晝石が見られた。埴輪片は東側・南側の裾からも採集され、形象埴輪と確認できたものは一点もなく、いづれも円筒埴輪片と見られた。尚、これらの埴輪片は筆者が表面採集し、学習院輔仁会高等科史学部で収納した。

三一 発掘経過

発掘調査実施日 昭和二十五年四月十一日〜十三日

参加者 学習院輔仁会高等科史学部

二年生 田実英一 堀田正祥（のち徳川義宣と改名）

一年生 前田幸雄 江村 清 穂樸俊泰

四月十一日、午前九時三十分。東急大井町線等々力駅集合。徒歩約十分で現地到着。嘗て既に発掘され七鈴鏡一面が出土してゐるとの情報を得てゐたので、墳丘頂部を中心にボーリング（長さ一二〇センチメートルの上に楕円状把手をつけた鉄棒による地表下突刺）を行なひ、頂部のやや凹んだ地点を扱ひ南北一メートル、東西二メートルのトレンチ区を設定発掘した。覆土からは少数の土師片と多数の縄文土器片が発見された。

すでに以前に発掘されたことがあつたらしく、覆土は攪乱された形跡があり粘土槨や木棺の存在は確認できないまま、表土より約七十センチメートル下あたりから金属遺物が出土し始めた。遺物の埋没状態に合はせてトレンチを拡張最終的には南北約二メートル東西約四メートルに及んだ。

写真は随時撮影したが、当時フラッシュやストロボはなく自然光線撮影であり、かつ墳丘には樹木があつて暗いので、四時頃までに撮影を終へなければならなかつた。当時ビニールシートはまだ世になく、降雨やいたづらの虞れもあつて翌日まで現場の保存される確信は得られないので、遺物は出土位置を記録しつつとりあげ、墳丘西側裾の巡查

派出所に保管を依頼した。尚、巡查からは発掘用具や労力、保管用の器材も提供を受けた。

第一日目出土として筆者の卓上日記の四月十一日の項に記録されてゐる遺物は次の通りである。

刀剣 八点

甲冑 二点

銚 一点

玉 二点 (ヒーズ玉状青石製)

帯 一点

鉄鍬 多数

四月十二日、同じく午前九時三十分等々力駅集合。参加者前日に同じ。

前日のトレンチを整備し、はたして粘土槨や木棺があったのか否かを重点的に調査。別に槨があるかも知れないと考へ、トレンチの四方を幅広くボーリングし、試掘ピットを二、三ヶ所設けたが、槨も遺物も発見できず、前日のトレンチ整備からも遺物は発見されなかった。

墳丘の北側は明らかに削りとられてゐるので、東西南側の裾および墳丘中腹に埴輪がないかボーリングで探したが、突き当てて発掘してみるといづれも葺石であった。但し葺石も決して密ではなかなり疎であると考へられた。よつて埴輪片が表面採集されてゐたことに鑑み、埴輪は既に大半失はれてゐるものと考へるに至つた。

北側と西側は道路となつてゐるので、東側と南側は民地に立ち入らせて貰ひ聴取と外見から周濠の有無の確認を計つたが、少なくとも周濠や土塁が嘗て存在したとの証言は得られず、結論に至らなかつた。

四月十三日、同じく午前九時三十分等々力駅集合。参加者前日に同じか、記録なし。但し田実、堀田、前田は確実に参加。

墳丘全体の測量と図面化は他日に期することとし、第一日目発掘のトレンチを拡げて整備し、製図用の記録を採った。その結果、鉄製遺物の出土地点より北側のセクションに炭化物の薄い層が縦横に認められ、その外側に僅かながら粘土層らしい部分が認められたので、これを以て「木棺確認」と記録した。但し上部は既に攪乱を受けてゐたらしく、粘土層や炭化物層は確認できなかった。その場での結論としては、鉄製の遺物はいづれも榎内からではなく、榎の外、南側に副葬されたものとして考へられた。薄い粘土層の外側にボーリングによって石を突き当て、礫層かと期待したが、いづれも極めて疎らで晝石の埋没か覆土に混入したものとみられた。

写真と記録を取り終へてトレンチを埋め戻し発掘調査作業を終へた。

四 遺物の出土位置と状態

遺物の出土状態を発掘時および後日製図した時の記憶を辿って記す。粘土層および木棺の南縁は確認できないままに発掘を進めたので、遺物が全て榎外に埋納されてゐたと断定することは避けなければならない。しかし木棺と確認した炭化物の層は遺物出土位置より北側で五十〜六十センチメートルほど西に寄った所から西へ約二メートル弱およんでをり、それぞれ東西両端から上方に向かって縦十〜四十センチメートルほどの炭化物縦層が僅かに認められた。その上部は攪乱を受けてゐたと見られ、判然とせず蓋に相当するはずの上部の炭化物の横層は確認できなかった。但

し上層部ほど積年の草木炭化物の沈下堆積密度は高まり混じるので、それ故に弁別確認できなかったものと考へてみる必要もあらう。

柳は東端をやや北に寄せ、西端をやや南に寄せた角度で東西に設置されてゐた。その柳の南側で、東端よりも二十〜三十センチメートルさらに東に寄った位置から西に向けて遺物は幅三十〜五十センチメートル、一列状で出土した。一番東から短甲二点、二つは横に寝かせて縦に連結した様に相接して出土した。刀剣八点と銚一点は短甲二点の西側に続き、それらは相接し束ね重ねた様にして埋納されゐた。玉二点もこの刀剣の間から発見された。帯金具（のちに胡籙と判定された遺物）は刀剣の西側に続いて出土し、一部に金銅破片が付着し金製の鉾が認められた。そのさらに西側に鉄鏃が十数本から二十数本ひと塊りになつて出土した。

五 発掘後報告

出土した遺物は全て学習院高等科史学部部室に持ち帰り玉二点と帯の一部と見られた金銅片はシャーレに納め、他は器種別に分類の上、個体別に分離復原を計った。

同年十一月に催された例年恒例の秋の輔仁会大会文化祭には、高等科史学部の活動発表として、これらの遺物を出る限り復原し展示した。接着剤には専らセメダインを用ゐたので、復原しても展示終了撤収の際にはまた大半が分離してしまつた。

墳丘全体の測量は後日平板測量によって実施した。その翌年の昭和二十六年と記憶するが、発掘調査に際して写真撮影を担当し、発掘日誌や製図用記録をとり図面を保管してゐた前田幸雄の自宅が火災で全焼した。等々力古墳の発掘調査記録は一切が灰燼に帰し、報告書作成の途は失はれたものと諦めるに至った。

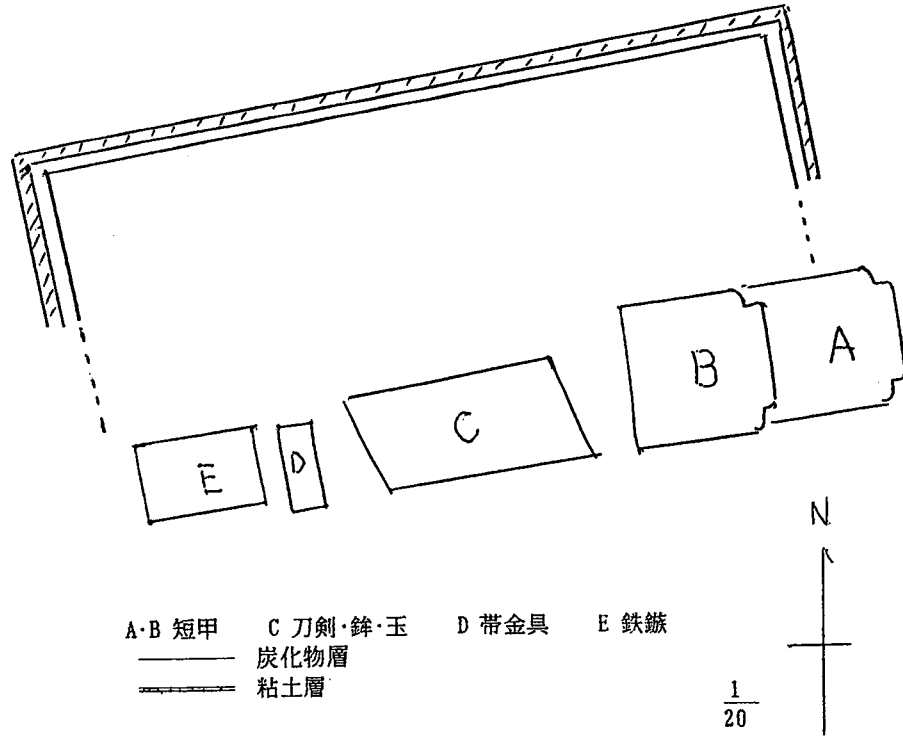
等々力古墳出土の遺物はそのまま学習院輔仁会高等科史学部部室に保管されてゐるはずであった。

前田幸雄は昭和六十年五月に死去し、等々力古墳発掘調査に参加した者の記憶も急速に薄れ、遺るは筆者の当時の卓上日記の僅かな記事と遺物のみとなつてしまつた。今日、歴史学学究の徒であるとともに文化財の保存と普及教育に責を有する美術館館長の職にある者として、等々力古墳の発掘調査が未報告のままであるのは甚だ以て慙悻の念に耐へない。既に四十五年半の年月が経過し筆者の記憶もまた怪しげではあるが、僅かな記録とそれを頼りに喚び戻した記憶とを併せ、当時の史学部部員の記憶をも聴取し援用して茲に報告する。

尚、学習院関係者以外の読者には誤解を招く懼れがあるので付言しておく。

学習院輔仁会高等科史学部とは、学校制度上の学部や学科ではない。輔仁会とは学習院に在籍する全学生、生徒、児童ならびに教職員によって構成されてゐる学習院全体の網羅的組織で、その会のもとに各運動部や文化部が大学、短大、高等科、女子高等科、中等科、女子中等科、それぞれに結成されてゐる。輔仁会高等科史学部とは、学習院高等科に於ける文化部のひとつである。

平成七年十月十日記



出土状態見取図